

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の具体化に関する研究」（基盤研究（B）

（1）、平成 11・12 年度、代表者伊藤隆、課題番号：11490010）より

### 3 有馬 学氏

ありま まなぶ 九州大学・大学院比較社会文化研究院・教授

日 時：1999年9月30日

出席者：伊藤隆 季武嘉也 中見立夫 梶田明宏 矢野信幸 小宮一夫 小池聖一  
西川誠 アンドリュー・ホール 伊藤光一 広瀬順皓 千葉功 土田宏成

**伊藤** 時間になりましたので始めさせていただきます。本日は有馬先生に『私の研究と史料』ということでお話いただきます。

**有馬** ざっと思い出しながらレジユメを作ってみました。実はいま研究室が惨憺たる有り様になっておりまして、もしかしたら埋もれたままで見つけきれなかったものもあるかもしれません。このレジユメは一応、調査や研究の取り掛かりが早い順に書いてありますが、ある仕事をどこかでスパッと決着をして終わらせるということがなかなかできないので、そのあとズルズルとまた史料が出てきたりして、必ずしもすべてが時間通りに並んでいるわけではありません。

最初に「1. 中野正剛・東方会関係」とありますが、これは私の卒論のテーマです。最初に中野正剛のことを調べ始めまして、そのときに原文書で見たものは、進藤一馬氏が当時まだ自民党の代議士で東京におりまして、彼のところに史料があるということで見せてもらいに行きました。これは現在、福岡市の玄洋社記念館に全部入っています。この史料は、もと東方会員の猪俣敬太郎という人が、『中野正剛の生涯』という伝記を書いているんですけども、この伝記編纂のときに集められた史料のようです。機関紙とかパンフレットとか本とかのほうが多くて、文書は大正期の書簡を卷子にしたものがいくつかございますが、いちばん多かったのは古島一雄宛の書簡だだと思います。この中身は息子の中野泰雄が書いた伝記の中にほぼ全文引用されて活字になっています。この他、そのときに見たものは、パンフレットとか東方会の議案書とかでした。

玄洋社記念館は、玄洋社記念館といいながら史料の実質としては中野正剛記念館のようなもので、玄洋社関係というのは実は、関係者の書の類がいっぱいあって展示してありますが、史料は殆どありません。ごくわずかに初期の福岡の民権結社——向陽社の史料が少しだけあります。この結社のメンバーが大体そのあと玄洋社に行ったわけで、それから、記念館の機関紙として『玄洋』というのがいまも出ていますが、おなじタイトルの機関紙

が戦前にもずっと出てまして、その中に一部、史料の紹介があるという程度のものです。

それで、卒論を書いたときは進藤さんのところにあった史料を見ただけでしたが、その後、田辺納という戦前の大阪の農民組合のリーダーにインタビューをしまして、史料も見せていただきました。大阪の農民組合には杉山元治郎がいますが、彼は全農のシンボルのような存在ですから、大阪府聯の実質は田辺が中心だったわけです。田辺は全農が分裂したときに左派の全国会議派に属し、大阪は全国会議派の拠点の1つでした。この全農の全国会議派のグループのかなりのリーダーが昭和13年に東方会に入ります。田辺さんのところで見た史料は、1つは全農大阪府聯関係のビラの類です。それから、戦後の初期の農民組合関係のものが若干ありました。あとは書簡ですが、これは中身が非常に面白いものです。大体が大阪の農民運動のリーダーからの書簡。あと稲村隆一の書簡。それから戦後初期の西尾の書簡。田辺氏は左派だったのですが、なぜか戦後は西尾にくっついたのでこういうものがあります。この書簡については、九大の『九州文化史研究所紀要』に「田辺納関係文書」として史料紹介をしております。

次の括弧に入っている吉川末次郎はあたってみたが、空振りという意味です。息子さんに連絡を取ったんですが史料はないということでした。蔵書は専修大学に全部寄贈したということでした。

あと、これに関連してインタビューをしました。猪俣敬太郎氏、進藤一馬氏、田辺納氏、羽原正一という人は大阪の農民運動関係の人です。こちら辺は1人で大体聞いていますが、稲村隆一は伊藤先生にお願いして内政史研究会のインタビューとしてやりまして、『稲村隆一氏談話速記録』があとで出ています。それから、臼井荘一も伊藤先生と2人で千葉まで行って話を聞きました。これはテープは確か起こしてあったと思います。それから、江藤隆明は鹿児島の人で、鹿児島で社会大衆党支部を作り、あとで東方会員になるんですが、この人のところに東方会時代の写真がちょっとありました。あとは、人吉市長を戦後ずっと長くやった永田正義氏。それから高橋勝三さんも東方会員なんですが、田々宮英太郎さんがやっている『史』という雑誌に東方会時代の回想を連載しています。この人のところに、東方会の機関紙は『東大陸』というのですが、それとは別に新聞の機関紙——『東方時報』とか『東方政経通信』がありました。これはごく一部しか残っていないのですが他にはないので、高橋さんが持っているものを見せてもらってコピーをとってあります。

**伊藤** そのコピーを僕がもらったのかな。僕も高橋勝三氏に会った記憶があるんだけど。

**有馬** それは多分、僕と別だと思えますね。

これは余談ですが、花田清輝という文芸批評家が戦後、吉本隆明と論争をしまして、花田清輝は東方会には原稿を売りに行っただけだと強弁したんですが、この『東方時報』を見ますと、党大会で書記をやっていることが分かります。

ほかに、これはまだアプローチしていないのでレジュメには書いておりませんが、前に伊藤先生と東条英機をやったNHKの片島ディレクターが福岡にいた頃に中野正剛の番組を作りまして、そのときに私が協力して彼は随分取材をしました。それで、滋賀に草野一郎平という代議士に戦後なった人がいて、この人は回想録を書いているんですけども、その人のところに史料があるのではないかという情報がありました。まだ遺族のところにはあたっておりません。

そういうことで、これはあまり論文にはなっていないんですが、史料は気にしながらズルズルと見ているという状態が続いております。

次は修士論文なんですが、高島素之のことをやりました。このときは小さい機関誌を主に大原社研にあった分と、それから同志社大学にあった分を見て論文を書いた記憶があります。文書にはあまりアプローチしていないんですが、このときに上杉慎吉の息子さんのところに書簡があるということを経尾龍一先生に教えてもらって出掛けて行きました。これは伊藤先生にお金を出してもらってというか、近代日本史料研究会にお金を出してもらって写真を撮ってきた記憶があります。このフィルムは東大の社研に入っているんじゃないかと思います。

**伊藤** あのとときの収集文書の中に入っているかもしれませんね。

**有馬** これは実は殆ど1点ぐらいしか高島の論文を書くときには使わなかったんですが、上杉宛の来簡です。

**伊藤** これはなかなか面白いですよ。

**有馬** このときに伊藤先生なんかと一緒に津久井龍雄さんのインタビューをやりにまして、これも速記録になっています。

その次ですが、自分一人で書いた論文であれこれ史料を探しまわったのは、『近代日本研究年報』に「日本革新農村協議会」のことを書きました。このときは塩崎弘明さんと殆どテーマがかけ合っていて、同じ人間についてインタビューしている部分も多分あるんだろうと思うんですが、インタビューは塩崎さんのほうが随分たくさんやっているとします。このときに、諏訪の農民運動の調査をしました。昭和5年に、あそこは蚕糸地帯ですので養蚕をやっている農民が諏訪農民団というグループを作って、政府に恐慌対策の陳情をするという事件がありました。下諏訪の駅で幟を立てて汽車に乗って、次の駅で全員検束された諏訪農民団事件といわれるものなんですが、そのリーダーだった黒田新一郎という人の遺族のところに行きました。黒田は戦後、長野の県会議員をやった人ですが、実はこれを引っ張り出すのに時間が結構かかりまして、黒田新一郎の息子さんに随分親切にさがしてもらったのですが、ここにあげている文書のうちのかなりの部分は、『近代日本研究年報』に掲載した論文を書くときには間に合っておりません。1つは日記ですが、これは手帳に書いたものです。それから諏訪農民団関係の史料と、革農協を作るときに彼があちこち

オルグして回ったときのメモがたくさんありました。

余談ですが、この他にも史料がありまして、たとえば、彼はシベリア出兵に兵卒として従軍しているんですね。そのときに取得した自動車とオートバイの免許がありました。これの片方が陸軍の1号と書いてありまして、もう片方は2号でしたから、自動車かオートバイのどちらかが1号の免許証なんですね。それは実は彼の政治活動と関係がないわけではなくて、この人は運転ができるようになったものですから、日本に戻ってきて農閑期に衆議院の運転手をやります。それで、そのときにいろいろ聞いた中央の政治情報を持って帰って村の青年を集めて話をするという中で、彼はこの地域の政治運動のリーダーになっていくという経緯があるんです。だから、自動車も非常に重要なんですね。

それから、この革農協の関係者が福岡に若干おりまして、これは基本的には産業組合系の運動ですので、九州でも産業組合をバックにして政治運動をやっているリーダーというのが関与しております。それで史料をその後あれこれ探したんですが、これはなかなかありませんでした。ここに書いてある倉富角次郎というのは筑後の浮羽郡のほうの人で、あつちは倉富勇三郎が出たところで倉富姓が多いところなんですから、この人の回想録がかなりの分量で出てきました。これも論文には間に合っていないんですが、コピーをとってあります。

**伊藤** これは印刷されたものなんですか。

**有馬** 手書きのものです。

**伊藤** さっきの黒田のは遺族が持っているということですか。

**有馬** 現物は遺族が持っています。

**伊藤** それでコピーを作ったんですか。

**有馬** はい。それで、このときにやったインタビューは、有馬頼寧の秘書だった豊福保次さん、これは伊藤先生も前にインタビューされています。それから、長野の活動家の中島袈裟重さん。回想録と書いてあるのは、これがちょっと失敗だったんですが、彼は自分で書いた原稿を持っていたんです。そのときはコピーをとらせてくれなかったのが、チラッと見せてもらっただけで、その後どうなったのかよく分からないんです。それから、安達巖さんにも聞きました。あと有賀清巳と今井久雄は諏訪の人です。

次にいきますが、そもそも僕は九大に行くときに、伊藤先生から、「地方に行ったら地域研究をやらないと面白くないよ」と言われたんですね。僕自身も行くときからそのような気持ちを強く持っていました。しかし、これは最初はなかなか難しく、やはり人脈がないと史料の情報というのは入ってこない。特にいまのように自治体史の編纂が盛んな場合にはいいんですけれども、そうでない場合には、顔をつないで信用してもらうということが非常に重要で、これに結構時間がかかりまして、最初はいわば空回り状態で上手くいかなかった記憶があります。それでまとまった史料に触れるようになったのは、4ページに

「社会運動関係」という区分を作っておりますのでそちらで詳しくお話しますが、当時、九大の大学院にいました小西秀隆君が浅原健三グループの社会運動のことをやりたいといっているので、彼と一緒に随分、インタビューをしたり史料を探したりしまして、その辺がきっかけになったと思います。

それで、非常に大きなまとまった史料にぶつかるようになったのはやはり、福岡県史に関わるようになってからであります。福岡県史というのはもうそろそろ幕引き状態なんです、福岡県地域史研究所という組織を作りまして、そこが県から委託を受けて県史の編纂をやるという形式でやっております。この地域史研究所が長期間に渡って相当の史料調査をしております。

**伊藤** その地域史研究所と西日本文化研究所というのは何なんですか。

**有馬** これが少し複雑なのですが、契約関係から言うと福岡県は西日本文化協会に委託しているんです。ただし西日本文化協会というのは、九州電力がお金を出してやっている文化団体で、いままで出版事業なんかをやっているんですが、これ自体には編纂能力がないので、西日本文化協会の中に地域史研究所という組織を作りまして、いわば文化協会がトンネルで県からお金を出してもらおうという形になっているんです。ですから、西日本文化協会そのものに問い合わせても、県史編纂に関わる史料調査とか収集史料のことは分からないんですね。

**伊藤** 県史の編者を見ると西日本文化協会になっていますよね。

**有馬** ええ。要するに、県史の無償配付分は福岡県の奥付で出して、市販する分は文化協会の奥付で出すという二重の奥付にしているんですね。

この地域史研究所は、九大の名誉教授で秀村選三先生という近世史の研究者がおられますが、この方が中心になって近世史・近代史の研究者を集めて作った組織で、県史の刊行が遅れても史料調査だけはやるという方針でずっと活動を続けてきています。

それでここにあげているのは、私が直接整理に多少とも関わったものだけですが、来る前に確認してきましたけれども、ここの収集史料の目録といいますか、家文書のタイトルを並べた目録があります。これは冊子体のものはなく、カードでしかできておりません。もちろんその中には複写史料が非常に多くて、たとえば、公文書館でコピーをとってきた何とか文書も1件という形で作っていて、あと古本屋から購入したのも1件という形で数えているわけですが、それでも家分けの件数で1000件を越える史料目録を持っているんですね。

**伊藤** この永江家文書なんかも1点になるわけですか。

**有馬** 1点です。かなりの程度は近世史料もしくは近世から近代にまたがった史料です。あとで触れますが、所蔵関係は複雑だったりするので、なかなかこういうところは公開の問題が難しいところがあるんですが、その中で整理に私が直接関わったものでいちばん大

きかったのは永江純一の関係文書です。福岡県の三池郡に西鉄の大牟田線の江の浦駅がありまして、これは永江が自分の家の前に駅を作ったんだというふうに言われていますけれども、まさに門の真ん前に駅があるんです。その家の蔵から出すというところからやりまして、実にいまだに終わってないんですね(笑)。まだ段ボール箱にいくつか未整理分が残っております。それで、これは非常に保存状態が錯綜しておりますので、現秩序に沿ったカードのとり方しかできないというので、正確な数がちょっと分かりません。つまり、カードの番号を見ただけでは、枝番号がいっぱい入っていますので、ザッと見て約1万点かなという感じです。ただしこれは、地域史研究所では年賀状も名刺も1点ごとにカードをとれという方針でやっていますので、そういう数え方をした1万点です。彼は大正5年に死んでしまいますので、もちろんそれまでしかありませんが、そこに書いてありますように、中身は非常に多岐にわたっています。永江と野田は自由民権期からの政治家でありますけれども、同時に地方における財界活動のリーダーですので、銀行、紡績会社、土木会社、鉄道に対する出資、学校その他と多岐に渡る活動をしております。永江という人は非常にまめな人で、残りが非常にいいんですね。それから日記は明治25年以降があります。

それで問題は目録なんです。数箱分の段ボール箱を残すところまでようやくこぎつけてカードの目録を作っています。途中までは学生に頼んでデータベースソフトで入力してもらったものがありまして、この入力済の分についてはこちらに目録が来ていると思います。全体からすると活字になったほうが少ないと思いますが、『九州石炭鉱業史資料目録』というのを西日本文化協会が出していて、それに連載で永江文書目録の一部が活字になっています。

これだけ豊富な内容があるので何とか使いたいと思って、民権期の史料については福岡県史で自由民権運動の史料集を作りました。そのかなりの部分が永江文書から取った史料です。それから季武さんと2人で、戦前における大選挙区制と政党支部というテーマで、第12回と第13回の総選挙について、主な史料は永江文書を使って、おそらく200枚ぐらいになる冗長な論文を書きました。選挙の実態としては、かなり詳しく分かったような気がいたします。

次に、永江文書とペアみたいになっています野田卯太郎関係文書ですが、これは文書の方は不思議なことに大正6年頃までしかないんです。私は野田家から受け入れるときにはタッチしていないので直接聞いていないんですが、あとの部分は東京に置いてあって焼けたという話なんです。しかし、日記は大正15年まであるんです。これは量的には永江文書よりはるかに少ないんですが、やはり永江と同様に活動していた民権期から大正期にかけての政治運動および地域における財界活動ですね。それと中央の財界との関係は、野田のほうが紡績連合会の委員として運動していた関係などもあってパイプが太くて、財界関係の史料も非常に豊富であります。この日記については広瀬順皓さんがマイクロフィルムをお

撮りになって、憲政資料室で見られるようになっていました。野田文書については全部目録をとりまして、同じデータベースソフトで入力したもの、およびそれを打ち出したものがございます。野田文書の利用については私個人は「東拓時代の野田卯太郎」という短い論文を1個書いただけです。フルに活用はしておりません。

次はちょっとまた筋が違う史料ですが、私が整理を手伝ったものとして甲斐資料というのがあります。これは、戦後に『八幡製鉄所労働運動誌』という戦前の八幡の労働運動を非常に詳細に書いた非常にいい本が出ていますが、その著者の旧蔵史料です。著者の甲斐募という人は、実は自分自身が製鉄所の外勤守衛だった人で、要するに、労働運動の情報収集に直接あたっていた人なんですね。そのために内容的に非常に詳細であるのと、史料の引用が非常に豊富で、戦前の製鉄所の労働運動史を単純に通史で書こうと思ったら、ちょっとこれは抜けないというような中身です。

**伊藤** これはどこにあるんですか。

**有馬** 地域史研究所の所蔵です。

その次に新日鉄八幡製鉄所所蔵資料と書いてあるんですが、実はこの甲斐資料の中に、甲斐さんは頑張って非常に立派な大著を新日鉄のために書いたんですが、そのことに対して新日鉄の遇し方が少し薄いということで不満を持っていたらしくて、そのときに八幡から借り出した資料の中で返していないものが甲斐資料の中に入っているのではないかとも言われていますが、これはどれがどれであるかはよく分からないんですね。

それと一連の資料で、これが実はいちばん問題になるんですが、八幡製鉄所の所蔵資料というのがございます。これはもちろん経営資料も重要で地域史研究所でコピーをとってありますが、ここで触れたいのは労働団体および政治団体関係の史料で、これにいちばん最初にアプローチしたのは、伊藤先生と2人で出掛けて行きまして見せてもらったときです。

**伊藤** あのときは見せてくれたんですね。

**有馬** そうなんです。実はこれは公開性の問題で非常にいろんな悶着がありまして、伊藤先生と一緒にいったときは、伊藤先生のとついで労働部を通して行ったんです。それで、労働部長さんが非常によく理解してくれて、そのときの閲覧については全面オープンという雰囲気やってくれました。それで、そのとき簿冊の目次のコピーを全部とってもらって、さてこのあと内容をどうやって見せてもらおうかという話になりまして、労働部が総務に話を回した途端にバサッとシャッターが下りた。このパターンは以後もずっと同じでありまして、労働部経由では非常にあたりがいいんですが、総務が頑なに公開を拒否しているという状況がずっと続いています。

これがいま問題にしております製鉄所史料の簿冊リストです。1件が1冊ずつの簿冊です。大雑把なイメージを言いますと、昭和2年から8年まで……8年までというのは民営

移管までということで、つまり、官営時代の昭和2年から8年までの、各団体につきそれぞれ年1冊のかなり厚いファイルがあるというふうに考えていただけると分かりやすいかと思います。これは驚くべきことには、無産政党だけではなくて政友会、民政党、それから、あそこはあとで国民同盟ができますが、既成政党全て同じように1組織にこんなファイルが1冊あるという、すごい史料です。

これはいま地域史研究所に複写があります。しかし、それは非公開です。どうやってこの複写をとらせるところまで食い込んだかという、我々もいろいろ知恵をしぼりまして、何回アプローチをしても駄目なのでやむを得ず、県史編纂に必要であるということで、簿冊の中身の1件ずつの目録だけ作らせてくれと。これはさすがに新日鉄の総務はオーケーしました。ところが、これは我々の当初のもくろみですが、全部で100冊ぐらいファイルがありますから、そんなことを通いでやっついてはいつまで経っても終わるわけがないんです。さすがに新日本製鉄ともなりますと、我々が作業をさせてもらいに行くと、どうもお昼を出さないわけにはいかないらしいんですね。それで、心苦しいのでそのたびに我々は辞退いたしますが、必ずお昼を用意するんです。まあ、弁当代ぐらいはどうということないんでしょうけれども、向こうも相当面倒くさいですから、そのうちに「いつまでお続けになりますか？」と言ってきたので、複写させてくれれば話は簡単であるということで交渉しまして、福岡県史編纂のためという限定つきで複写をオーケーしてくれたんです。ということで全部マイクロフィルムにして……

**伊藤** 内容もですか。

**有馬** そうですね。僕は大体それでもう突破したなと思いました。要するに、誰かがどこかに論文を書いても、それがベースになって福岡県史の通史編ができるんだと言えばそれでいいのではないかと私は思ってたんです。しかし、そう簡単にはいきませんでした。福岡県史は『地域史研究』という雑誌も出してますし『研究編』というのも出していますから、基本的には媒体がそれであれば構わないということなんでしょうが。実は私、伊藤先生の退官記念論文集で満州事変期の国民社会主義についての論文を書いたんですが、あのときこの史料を使って国民同盟の支部のことをもう少し詳細に実態を書くつもりでいたんですが、そのような発表の仕方にいろいろ議論があって止めたわけです。それでああいう形の論文になったという経緯があるんです。ということでこれは地域史研究所が、マイクロフィルムとそれを紙焼きにして製本したものも持っておりますが、いまのところ非公開であります。

実は、経営資料も含めてこんな厚い新日鉄が作っている史料目録のコピーがあるんですが……

**伊藤** それはこれも含んでいるわけですか。

**有馬** 含んでいます。きょう持ってきたのは政治団体・労働団体のところだけなんですけ



れども。

それで、中身についてはそこにちょっと書いてありますが、あそこでは外勤守衛というんですが、これが基本的に運動の情報を収集して労働部長に報告するという、その報告およびそれに添付された資料であります。ですから、ある角度から見ればスパイ行為をやっているわけです。しかし、どうもいろいろ資料を読んできると、スパイというイメージはちょっとまずいといいますか、実態に即していないだろうと。これはあくまでも資料を読んだ印象なんですけれども、たとえば、浅原健三系のグループというのは政党としては全国労働大衆党の系統で、これは社会運動史では中間派ということになっているんですが、八幡では浅原系は左派なんです。ところが、どうも外勤守衛が執行委員会に同席している形跡があるんですね。

**伊藤** 同席しているんですよ。

**有馬** 人から聞いて得た情報ではなくて、自分がその場において取った情報なんです。つまり、そういう関係である。ということは、この外勤守衛は運動側からすれば製鉄所に対するパイプでもありますから、いわばもちつもたれつという関係であるらしい。

それともう1つ、この資料で特徴的なのは、非常に詳細な支部の、しかも八幡という単位ではなくて、たとえば、製鉄所の中に郷里が同じであるというグループがあったり、大から小までさまざまな人間関係のグループがありまして、それが非常に複雑に選挙のときの集票活動に結びついている構造になっています。それを相当詳細に追いかけていてもすごく面白い資料なんです。逆にある特定選挙に関する直接のデータというのは、この中には全然出てこないんですね。これは、あとで衆議院議員になります田尻生五という人が当時この労働部長をやってまして、これは製鉄所の労務管理の中では「田尻労政」と言われて一時代を画した、ある種、労働組合に対してソフトな行政なんですけれども、基本的に製鉄所内における政治活動について、製鉄所はいわば抑圧しないという方針でやってまして、ある意味では自由に運動をやっているんですね。それで、田尻は選挙運動には干渉しないという方針を示していたといわれています。

それと、なぜ外勤守衛という言葉を使うかは、かくたる根拠は僕もないんですけれども、基本的にこの人たちは製鉄所の中でだけ活動しているわけではないのです。むしろこれは、無産政党といえども政党組織としては、基本的には選挙というのが節目になって組織活動をやっていくわけです。そうすると、選挙というのは要するに居住地域が単位でありますから、そこら辺で情報を集めていたということで、外勤守衛という言い方の1つの由来なのかなという気もしています。

そういう意味では製鉄所というのは、製鉄所労働者の政治活動について、非合法組織は別ですけれども、あまり抑圧的な態度をとっていない。干渉しないといっても選挙のときに全然情報をとらないはずはないんですけれども、それは別途何らかの形で上にあがって

いたのではないか。だから、この形のファイルの中には、選挙運動そのものの直接的な情報というは入っていません。ただ、やっぱり見ていると、そうでない時期というのは次の選挙までの「選間期」でありますから、無産政党といえども基本的には選挙を1つの節目にしたサイクルで回っているんだなというのが実感されます。選挙運動に埋没してはいけない、当選第一主義を排するというのが、建前として戦前の無産政党の一貫したスローガンなんですけれども、実情はやはり選挙がいちばん面白いという形の活動になっているのがよく分かります。

**伊藤** このとき僕も一緒に見ましたけど、八幡製鉄所の職員というのは、実に偉い存在だということがよく分かりました。

**有馬** 正規の職員は、職工といっても請負の職夫とは区別されたかなりの存在です。これは本当にこの資料を見ていると非常に不思議で、たとえば、選挙のときに集票活動をやるやつが借金を作って、これが返せなくて共済から前借りをしたり、それでも穴埋めできなくなってバイトをやるために欠勤したり、そういうことをするんですね。しかし、そのためにクビになったという話は一切ないんです。

この史料は本当に何とかしたいんですが、昭和期の政党の支部の活動についてこのぐらい詳細な史料というのは、おそらく殆どないんじゃないかと思うんですね。それでいろいろ考えているんですが、1つは非常に単純でありますけれども、あちこちから何度もトライするというのが正攻法としてあるかなど。それからあとは、崩せそうな上からの筋を見つけないか、この2つぐらいではなかろうかと思っています。

ただ、ちょっと急ぎたいのは、伊藤先生と一緒にいった立派な本事務所（戦前からそう呼ばれていた）が解体されました。それで、あそこはいまはもう鉄は駄目で、スペースワールドというテーマパークをやっていたりしますので、そっちのほうがウエイトが高かったりしますから、ものがどこに行ってしまうかというのが非常に心配ないんですね。それから、これは本事務所のロッカーの中に入っていたんですが、そのあと行ったときに、それとは別に資料室を作りました。この内容は1つは博物館的なモノ資料です。もう1つは、あそこは宿老という制度が戦前にありまして、要するに、熟練労働者の超エリートですね。職工なんだけれども、初期にドイツやイギリスに技術を教わりに行った人たち。この宿老というのは終身待遇らしいんですけれども、そういう人たちの手記とか、勉強したノートとか、そういう類のもので、随分面白いものがたくさんあるんです。それが、その後行ってないのでどうなったか分からないんですけれども、場所的にいうとテーマパークの中に入ってしまったはずなので、どこかよそに行っているはずですよ。きょうお話しした労働団体・政治団体関係資料というのは、その資料室とは別のところにあるんですけれども、ともかくあの製鉄所の資料が今後どうなるのか、きちんと押さえていかなければいけないものだと思います。

**中見** 官営八幡製鉄所時代の資料とか工場日誌とかはあるんですか。

**有馬** 昭和2年から8年と書いたのは、労働団体・政治団体関係資料はそうであって、八幡製鉄所に関わる資料としてはもちろん創立時からあります。経営資料、技術的な内容に関する資料ですね。

**中見** それはその資料室には一応あるわけですか。

**有馬** こころ辺が境目がはっきりしないんですが、基本的には本事務所が管理してまして、そういう経営資料も資料室とは別の扱いになっているようです。

**伊藤** 新日鉄の歴史というのに随分使ってたんじゃないですかね。

**有馬** 経営資料とか技術的な内容のものは多分使っていると思いますね。

結局、新日鉄八幡の総務がこれの公開について非常に頑なであるのは、内容的には全く根拠がないんですね。実は今日お話した史料は労務管理の資料ではないんです。それともう1つは、昭和8年までですから、これは完全に官営時代なので新日鉄としては、製鉄所が当時何をやっていようが預かり知ったことではないはずなんですけれども、労働部の管轄の労務に関する資料という漠然たる意識というのがあって、殆ど内容的には根拠がないんですけども、公開については非常に頑なです。

**伊藤** あのとときに言っていたのは、要するに、いまでもこういうことをやっているんじゃないのという、あらぬ疑いをかけられては困るというようなことを言ってましたが、それは多分言い訳であって、もし万が一まずいことがあったら自分の責任になるから困るということだろうと思いますけどね。

**有馬** ということで、これは大物の資料なんですけど、まだ基本的には活用はしていないものであります。

次にまいります。これもちょっと整理に苦労したのであげておいたんですが、ちょっと変わった史料で安高団兵衛文書という、これは芦屋の安高農場というのをいまでも遺族が人を雇って経営しているんですね。

**伊藤** それは農地改革にならなかったんですか。

**有馬** これはなっていないですね。要するに自作ですから。家族経営でやって、なおかつ割と広いので人も雇っているという経営の形態で、いまでもそういう経営形態なんです。

それで、この人はこれは記録魔なんですね。自分の活動に関するありとあらゆることについて記録を残していて、これは非常に貴重な史料です。特に農業技術とか農業経営に関しては非常に詳細な史料がありまして、笑い話みたいな話ですけど、芦屋にはアメリカ軍が基地を持っていて、そのあといまは自衛隊が基地を持っているんです。それで、この基地の拡張のために防風林を伐って、近隣の農村に被害が出たというので補償要求があったんですけども、その補償額の算定根拠がないではないかという行政の主張に対して、この人の記録を根拠に補償額が相当正確に算定されて補償を獲得できたという、そのぐらい

長年に渡る詳細な記録を持っている人です。それで、これは農業総合研究所が注目してまして、この史料を借り出して複写をしたりしております。

**伊藤** 農業総研ですか。

**有馬** はい。それはいま全部返ってまして、基本的に安高家のほうから寄贈を受けてますので、いま所蔵は地域史研究所になっています。

**伊藤** 農業総研で多分、コピーを作ったんでしょうね。

**有馬** 全部ではないんですけども作ったと思います。

それで、どういう類の記録魔かと言うと、たとえば、慰安旅行に行ったときに一緒に写真を撮った宿の女中さんの名前・出身・年齢まで書いているんです。そこで私が少し興味があったのは、いわば篤農家で地域の有力者でありますから、国民精神総動員運動とか翼賛会といったものの地域の役員になるわけです。そういう人物でありますから、戦後も絶対捨てずにその関係の史料が残っているわけです。

ちょっと面白かったのは、これは割といろんなところで目にするんですけども、橋本欣五郎の大日本青年党が『太陽大日本』という機関紙を出してまして、この機関紙で大井上農法の宣伝をやるんですね。大日本青年党の党员であるかどうかとは別に『太陽大日本』という機関紙は、農村の調査をやっていて結構いろんなところで見ますから、それなりに戦時期の肥料の状況が厳しい中では、受け入れられた面もあるのかなという気がします。大井上農法というのは、大井上康という農本主義的な農業指導者が提唱したもので、僕もあまりよく知りませんが、年がら年中、窒素・リン酸・カリ全部を同時にやる必要はないから、葉っぱが伸びるときは葉っぱが伸びる肥料をやればいいんだという、基本的にはそういう原理らしいんですけども、そういう農法なんですね。

それでちょっとびっくりしたのは、その下の「参加した地域調査」という項目の浮羽郡というところがありますが、ここは植木地帯で、いまは果樹をやっているんですね。巨峰というブドウがありますけれども、あれとか柿とかですね。ここで史料調査をやっているときにおじいさんに話を聞いてましたら、巨峰の原種を作ったのは大井上康なんだそうです。それで僕がびっくりしていたら、向こうもびっくりして「あんたは何で大井上先生を知っているのか」というわけです。いろいろ聞くと、最初に浮羽郡の田主丸町の辺りに苗を作ってくれという依頼があって、そこから始めて自分のところでも生産するようになったと。大井上康の農法については、戦前から知っているという話をしていました。

地域史研究所は毎年、夏休みなどに県内の地域の史料調査をずっとやっているんですが、ここではいろいろと面白い経験をしました。割とよく出てきたのは、戸長クラスの人の家に近世から近代にかけての雑多な史料が残っている。こういうのは、ちょっとあるなという感じだとすぐ 1000 点くらいになります。だからといってそれで論文を 1 本書けるかというところではないんですけども、そういうものが集まってきたときに、やっぱ

りこれは史料としては重要性を持つてくるのではないのかなというふうには思っています。これは随分いろんなところでやりました。

それから、いま本格的な整理を始めたのは、加藤新次郎という、これは旧朝倉郡——いまは甘木市ですが、衆議院議員をやった自由党系の人で、この人の文書が出てきまして、僕はザッと見ただけですけれども、断続的に明治20年代の日記があるのと、書簡が相当あります。冊子体の主なものは目録に若干とりましたけれども、書簡は全く手つかずで、これからやろうと思っているところです。

次に柳川市史もやっているんですが、ここは拠点とし柳川古文書館があります。1985年にできた県立・市営という変わった組織形態ですが、旧柳川藩領域ぐらいを対象に、主として近世・近代史料の調査・収集をやっています。整理が済んだものについては、『柳川古文書館史料目録』として継続刊行中です。

この辺りの地域の政治に関する史料としては、旧柳川藩領というので言えば野田文書と永江文書が大きいわけですが、それ以外に彼らと同じグループで政治活動をやっていた人たちですね。目録のリストで名前をあげている中で衆議院議員になったのは立花親信と富安保太郎です。立花親俊という人物は明治期のかかなり長い期間の日記がありまして、これは、三池郡銀水村というところの村レベルの細かい政治情報が出てきます。銀水村というのは、自由党・政友会の牙城ですが、内部の政治的調整が難しいところなんですね。それから吉田孫一郎は、柳川藩のかかなり偉い家の人で、幕末から明治いっぱいぐらいまでの日記があります。渡辺村男は、非自由党系のこの辺りのリーダーです。それから富安は、自由党・政友会系の政治家です。これは期待したほど大したものはありませんが、いま整理している最中です。

柳川というのは、総体的に言うと社会的な流動性があまり高いところではない。ですから、逆に言うと市財政としては非常にきついタイプのところなんですね。産業が起こってくるわけでもないし、サラリーマン人口が増えているわけでもない。そうしますと、史料調査をやる側から見ますと、家文書がないなら確認してつぶしていけるし、遺族の追跡がしやすいところでもあります。そういう意味では、柳川古文書館の調査は相当質が高い調査をこれまでにやってきているのではないかなと思います。

それから、太宰府市史にもちょっと関係していますが、これはそんなにまとまった文書は出てこなかったんです。最初の原文書は太宰府天満宮にあるんですが、太宰府天満宮の社家に小野家といういくつかの流れがありまして、そのうちの1つの流れで小野加賀家というのがあります。小野加賀文書というのは、小野隆介という非自由党系で衆議院議員になった人物で、もともとは久留米の出で確か真木和泉の弟にあたるんじゃないかと思いますが、その関係文書がありました。ただし、これは政治情報はそんなに多くなくて、民権期の史料が若干ありましたが、これは福岡県史の自由民権運動の史料集に入れております。

太宰府市史では、この辺りの戸長をやった高原という家の文書が、これも原文書はまだ高原家にあるんですが、明治期に高原謙次郎という人物が生まれて、この人は、福岡農法で有名な林遠里という農業指導者の勸農社のメンバーで、福岡農法普及のために全国行脚をするんですね。そのときのとても面白い日記が残ってます。

それから大賀という家は、厳密に言うと太宰府ではなくて隣の二日市なんですが、いまでも大きな酒屋さんをやっている家です。これは文書自体は福岡県立図書館に寄託になっていますが、数万点の戸長役場文書がありまして、これも確かまだ整理を終わっていないんじゃないかと思っています。

このようなものに割と出くわすことが多いんです。近代史研究者があまり大勢いないところでは、私は明治期が専門ではありませんのでというわけにもいかないのですが、見ているうちに整理に関わるようになったといいますか、そういう史料に対する接し方になるんですね。

それから、もう1つ史料所蔵機関として割と重要なのは、九州大学の石炭研究資料センターです。ここは、その名の通り基本的には石炭産業関係の史料を収集しておりますが、それ以外にも、これは前身が産業労働研究所という組織でありまして、その時期にはかなり社会運動関係の史料を集めていたんです。その旧蔵史料と石炭産業関係史料。その中でいちばん大物は麻生家文書であろうと思います。かなり石炭研のほうで整理をしておりますが、基本的に彼らの関心は石炭産業史および炭鉱経営史ですので、そちらのほうの史料から整理をやっていきますから、膨大な書簡があるんですが、これはいまだに全く手がついておりません。これはかなり面白そうな文書なので、少し横から手を出したいなと思っているんですけども、こっちも他にもいろいろ抱えていて到底手が回らないというのが現状です。

石炭研所蔵文書の中で次の宮崎文庫というのは、この他にも社会運動関係の史料はあるんですが、まとまったものとしては、宮崎太郎という戦前の筑豊の炭鉱労働運動の指導者がいまして、彼は社民系で、インタビューをしたこともあります。彼が持っていた史料ですね。これの特徴は、写真が非常に多いことです。最近、石炭研で増えておりますのは、九州の閉山になった炭鉱の労働組合の史料をただでもらってきて、山のように積んであるという状況になっています。経営側の史料はやはりなかなか難しく、高島だとか相当積極的にアプローチしたみたいですが、なかなか持ってこれないようです。

それともう1つは、福岡市博物館の史料整理をかなり手伝ってまして、鹿島鍋島家の資料ですね。これは佐賀の鍋島の分家で、鹿島藩というのは2万石ぐらいだと思うんですが、その藩主の家の文書で、これは購入資料です。福岡市博物館というのは、福岡市という枠にあまりこだわらずに史料を購入することがありますが、これも相当高い値段だったので佐賀が買い切れなかったんですね。それで九州の外に出るよりはいいであろうという

ので福岡市が買ってしまったんです。これは近世・近代史料なんですが、その中に書簡がかなりたくさんありまして、鍋島直彬——ナオアキと読むんでしょうか、貴族院議員になった人宛の書簡と、彼が大隈に宛てた書簡の控えがありました。大隈宛が200点ぐらいですね。これが中心になる史料かなと思います。このとき僕は学生諸君に大分やってもらって、自分であまり書簡の中身に目を通していないのでよく分からないんですけども、政治情報は相当あるような感じがいたします。

なお、鍋島直彬は初代沖縄県令になって行くんですが、同じ鹿島に祐徳稲荷という日本三大稲荷の1つと称する大きな神社があります。それで、鍋島というのは文芸好きな大名だったらしくて、和歌とか連歌とか文芸関係のものをかなり祐徳神社が持っているんですね。その中に、直彬が沖縄県令になって沖縄に行くときの『南島紀事』という表題がついた日記がありました。これはコピーをさせてもらいました。ちょっと珍しいんじゃないかと思います。

福岡市博物館の関係では、これもちょっといわく付きなんですが、末永節という大陸浪人がいるんですね。

**伊藤** これは末永何と読むんですか。

**有馬** みさおです。

これは、彼が関わった辛亥革命前後の中国革命関係の史料が目玉です。ただ整理してみた印象で言うと、非常に面白いんですが、思ったほどすごいものはあまりなかったんですね。大分前、最初にこの史料の整理にかかる前にそこに話に行ったときにはご本人がまだ健在で、本人の話では、緒方竹虎が借りていって空襲で焼けてしまったという話なんです。実はこの人、革命派から辛亥革命後のゴタゴタの中で帝政派に転向しちゃうんですね。そのときの資料でとても面白いものがありました。

これのいわく付きとは何かというと、実はまだ所蔵がはっきりしていません。末永さんが亡くなって、その養女の方との間の買い取り交渉が難航してまして、目録を作って史料そのものは博物館が預かっていますが、所有権はまだ動いていないし、寄託にもなっていないという状態です。

末永関係では蔵書も一緒に整理をしまして、これはどうということはないものばかりだったんですが、一つだけ『孫逸仙伝』という中文の薄っぺらい粗末な装丁の孫文の伝記がありました。もちろん読めませんが、序文のあたりがどこかで見たような言い回しだなと。それでよくよく見たら、宮崎滔天の『三十三年の夢』で読んだ一節が出てくるんです。調べてみたら、滔天の『三十三年の夢』の中から孫文の伝記に関わるどころだけ抜粋して抄訳した、そういう意味では、本としてはあまり素性のよろしくない安直本なんですね。ところが、これは実は革命期にパンフレットとして絶大な威力を発揮したらしいんです。要するに、亡命していきなり帰ってくるわけですから、孫文って誰だという奴がいるような

状況ですね。そういう中で孫文の宣伝のパンフレットとしては、非常に効果があったものなんだそうです。南京の博物館にガラスケースに入れて陳列してあるらしいです。宮崎滔天全集で調べましたら、これは日本国内初見でした。そういう素性のよくない本だからすぐなくなっちゃうんでしょうね。だから、島田虔次さんの解題を読みましたら、そういうものが出ているというのは知っているけれども、見ていないということでした。

そのほかに、福岡県内の史料所蔵機関が持っている史料について若干お話ししますと、久留米市に文化財収蔵館というのがあります。ここは文書としては鶴久文書と黒岩文書という、これはどちらもコレクターが持っていた史料なのですが、並外れたコレクターで、地域関係の非常にいい史料を膨大に集めています。この辺では有名なコレクターです。鶴久さんという人には僕も生前にちょっと会ったことがあります。これは彼のコレクションの全部ではなくて一部なのですが、かなりの部分を何とか久留米で引き取ったということですよ。鶴久文書の中には、日清貿易研究所関係の当時行っていた初期の生徒の日記だとか見聞録だとか、そういうものがありました。

次の樋口家文書は、八女郡の樋口という、教育者で文人みたいな人なのですが、この人は政治的には南筑協会という国民協会系のグループの活動家です。彼は選挙には出たことがないですが、中村彦次という政治家の後援者で、その関係の書簡が相当あるようです。来年ぐらいからちゃんと整理しようかなと思ってます。

次に田川市立図書館ですが、ここには林田春次郎という、確か県会議長もやった人だと思いますが、その人の関係文書で、大政翼賛会の田川支部関係の史料がかなりまとまっています。これはもうちょっとよく調べなければならぬんですが、実は製本されておまして、その製本はどうも図書館がやったらしいんです。それで、どうも翼賛会関係だけまとめて製本したような感じで、その連れの史料があったのではないかと調べているんですが、まだよく分かりません。ただ、翼賛会の支部の史料としては、量的にはかなりのものだと思います。翼賛会の支部の史料は殆どないですから、これはかなりいいのではないかなと思っています。

それから、もともと関心があったものですから社会運動関係者のところを小西秀隆氏とかなり探してまいりました。ただし、文書があったのはレジュメにあったぐらいですね。木林善三郎という人は、水平社で農民運動のリーダーだった人です。次の吉塚謙吉というのは、筑後農民組合という、ちょっと変わった地域の農民組合のリーダーだった人です。それから、山本作馬という人は水平社なのですが、共産党員になってクートベに行って、戻ってきて四・一六事件で検挙されるという、そういう人の史料です。みすずの現代史料にこの人の調書が入っています。次の田中松月は、お坊さんなのですが水平社の関係者で、県会議員になった人です。

次に「インタビュー」の項目ですが、堂本為広という人は浅原系の幹部で県議員です。



伊東光次は、建設者同盟出身の佐賀の農民運動のリーダーです。岩田重蔵というのは、水平社のあの辺のボスです。稲富稜人をご承知だろうと思いますが、稲富のところは史料はなくて、新聞の切り抜きみたいなものはコピーをとりました。このうち農民運動関係については、福岡県史の史料編を入れました。「第三巻」はいま最後の校正をやっているところです。

それから、次の国家主義運動関係のところですが、これは他の人と一緒にやったもので、別に私が全部見つけたわけではありません。佐々木清関係文書というのは、護国軍という軍人を中心にした国家主義団体が九州にあったんですが、そのリーダーだった人の史料がありまして、彼は久留米の師団にいたんですが、そのときに満井佐吉と親交があつて、満井が陸軍省に行ったあともしょっちゅう手紙のやりとりをしております。書簡の現物と彼自身が書簡を原稿用紙に起こしたもの——こっちのほうが実は量が多いので、書簡は全部残っていないということです。それから相当長い回想録ですね。これは平井一臣君という、九大の法学部を出て、いま鹿児島大学の先生をしています、彼が見つめてきて、2人で史料紹介をいたしました。

その他にインタビューをしたのは、藪本正義という青年党周辺みたいなところにいた人です。この「(覚書)」というのは、藪本氏と次の自念春次郎との2人とも自分が書いた短い回想のメモみたいなものがあつて、そのコピーをとったという意味です。自念春次郎という人は、これは珍しい名字ですが、門司の港湾荷役で自念組というのがありまして、その親分です。門司は橋本欣五郎の出身地ですが、この人は橋本欣五郎のスポンサーだったということです。とても面白い人でした。いまはもう亡くなっていますが、門司の高台の瀟洒な家に住んでいまして、自宅で来客に会うのに、きちんとスリーピースにネクタイをして出てくる人でした。こういうタイプの人によくいるんですが、趣味人で、たとえば九大フィルハーモニーというのはアマチュアオーケストラでは古いらしいんですが、戦前にそこのメンバーにトロンボーンを習いに福岡まで通っていたという話をしていました。ちょっと残念だったのは、彼はそういう趣味人なので16ミリのフィルムを戦前にたくさん撮ってます。それで、門司の港湾荷役の様子を撮影したものをちょっと見せてもらいましたが、実は自分が映した青年党の大会のフィルムがあるんだと言うので随分探してもらったんですが、これはついに見つかりませんでした。この人はあとで翼賛会福岡県支部の幹部になります。

次に、ちょっと脈絡がない史料として佐々木正蔵関係資料という、これも非自由党系の代議士になった人物ですが、備忘録1冊だけ出てきています。これは小郡市史にすでに活字になっています。

その次の括弧に括弧してあるのは、大内暢造の遺族に会いましたが、これもまた空振りでした。八女郡に大内の旧宅が町の文化財で保存されておりまして、そこまで行きましたが、

基本的には何もし。全くゼロではなくて、近衛篤磨の手紙を額装したものが2つぐらい壁にかかっておりました。それと大内が亡くなったときの弔辞で、若干経歴が分かる情報が入っている弔辞があった程度で、これは完全な空振りでした。

次に宮崎ですが、宮崎県庁文書を延々この何年か読んできて、その一端は県史の史料編にしたというのと、年報の19号に論文を1つ書いたというのと、まだそのぐらいしかアウトプットはないんですが、これは県庁文書としては日本有数の内容であろうと思います。ただし、どういうふうに公開していくかということにつきまして、我々が県史の委員でありながら、どうも県とはチャンネルがかけ違っておりまして、これから少し運動していかなければと思っています。

**伊藤** これは差別問題と関係あるんですか。

**有馬** 関係ないですね。

それから、宮崎では黒木親慶文書があります。これは、前に「近代日本研究通信」に書いたところ中見先生がただちに反応をくださいます、北大の原暉之さんと3人で原さんを代表者とする科研費で調査をいたしました。少し補足しますと、目録は全部できております。それで、僕が最初に見たときにはどういう状態になっていたかということ、黒木家から宮崎県の県立博物館に寄託されていて、ただしこれは寄託といっても預かっただけで、積極的な整理その他は何もやっていないという状況でした。その状態でとにかく目録を一一県立図書館の史料の主みたいいな岩切悦子さんという方がいるんですが、この人が目録を作りました。それでマイクロフィルムを撮って、私のところと中見先生のところと原さんのところにあるという状況です。

ただし、ちょっと混乱するのは、1つはその過程で東大にフィルムがいております。

**伊藤** 東大のどこですか。

**有馬** 法学部です。坂井雄吉さんが宮崎に行って調査をして、なおかつフィルムを撮り、そのフィルムに基づいて東大は独自に目録を作ったということです。それから、黒木と非常に近かった星野五郎という人物から東大に寄贈されたという史料も合わせて目録化してあります。この目録は活字になっていました。

それで、そのときに坂井さんが、宮崎の県立博物館としては預かったというだけで、古い革のトランクに入れたまましまっているという状況だったので、けしからんというふうに仲介者に向かって憤慨したりしていたものですから、あとの処置について少し宮崎のほうで混乱したみたいですが、現状で言うと、文書そのものはえびの市の郷土資料館に寄託されているという状況です。ただし、文書と一緒にかなりの写真がありまして、これは中見先生なんかに見ていただくとかなりいいものらしいんですが、これについては誰も目録は作っておりません。えびのの資料館も積み上げてしまっているという状況です。

**伊藤** シベリア出兵を書いた人が借り出してどうのこうのというのは知ってましたが、あ

れはどうなったんですか。

**有馬** それももう1つの混乱要因なんですけど、高橋治さんという『派兵』という本を書いた作家ですが、これはどういう経緯かというところ、ここはずっと養子が続いていて、親慶自身も養子で、その息子の虎雄氏も養子でした。それで、虎雄さんの息子に映画監督の黒木和雄氏がいるんですが、高橋治さんはシナリオを書いていたりしていた人なので、黒木和雄経由でこの史料を見て……といってもロシア語の史料なんかは見てないんですが、そのうちの何点かを借り出しております。これは借用書が残っていて、いまだに返してないという状態です。

**伊藤** それはかなりの分量になるわけですか。

**有馬** いえ、数はそんなに大したものではありません。

それで、外語大でやった中見先生のシンポジウムの際に、中見先生もその辺の配慮があってスピーカーとして高橋さんをお呼びしたのですが、そのときには、近々『派兵』の第五巻を出すので、そうしたら私が収集した史料もつけて返すと言っていたんですけども、その後、五巻も出ないし史料も返らないという状態のままできています。点数にして数点ぐらいで、何十点というものではありません。ただ、面白そうなところを多分持っていったんでしょうね。

私は2度か3度えびのの黒木家に行って、一度は蔵の中に入れてもらいました。そのときに、親慶の父親の黒木実幸も有力者なんですけど、その関係文書があって、これはほったらかしたままでした。それから、黒木虎雄氏がそのときに、トランクとは別の小さな菓子箱みたいなものに入れた書簡を確か持ってきて見せてくれたんです。それは中身が面白かったので……確か岡村寧次の書簡か何かだと思んですけども、その場でそれを畳の上に置いてカラーフィルムで上から写したんですが、それは目録に入っていないんです。ということは、それはトランクとは別のところに虎雄さんがしまってしまったんだと思んです。それでもう1回家捜ししなければならぬので、黒木虎雄氏はもう亡くなっていますから、家捜しをしてもらおうと思って、えびのの親戚筋の有力者のところにいろいろ話を聞きに行ったときに、虎雄さんは秋丸家から入った養子でしたから、確か秋丸文書の話もしてました。そのあとすぐ原朗先生が整理したという新聞記事が出たのでちょっとびっくりしました。

この家捜しがなかなか難しく、いま空き家状態で閉めているんですが、ただ鍵を借りて入れればいいといってもこれもなかなか難しく、そもそも黒木文書が宮崎の県立図書館に寄託になった経緯というのが、例の金塊伝説で1回庭を勝手に掘られてしまって、宮崎の郷土史家の人たちが非常に危険であるということで心配して博物館に預けたということなんです。いまでもときどき変な奴が周りをウロウロしているとかいう話がありまして、ややこしいんですね。だから、もう少しそこら辺をちゃんとしないと、目録を作ってフィ

ルムは一応撮りましたが、完璧に終わりというわけにはいかない。

それから、この史料を見るにあたって仲介してくれた方たちが、現物をえびのの郷土資料館に置いておくのが、はたして最適であるかどうかということについて疑問を呈しておりまして、季武さんのほうから憲政資料室に1度話をしてもらったんですが、これは若干不調でありました。ちょっとその辺のことも考えなければならないという状況です。

あと宮崎県史に関しては、ともかく県庁文書を見るのに追われておりまして、あまり史料調査はやっておりません。他に目立った史料としては、児玉伊織という県会議員の、かなりの長期間の日記が県立図書館にあります。非常にいい状態のもので、ただし、これについては季武さんのほうがかなり読まれていて、僕はあまりよく知りません。宮崎でのインタビューは、もと県会議員だった2人ぐらいにしかやっておりません。

「その他」と書いてありますが、手がけて原稿にならなかった調査はいろいろあるんですが、時間を使った割に1枚も書かなかった最も効率が悪かったものは、茅原華山について調べていたものです。これはかなり投資もしているんですが結局1枚も書かなかった。

その関わりで鈴木正吾さんのインタビューを、これは内政史研究会で出てますが、伊藤先生と一緒にやってやりました。史料はなかったんですが、そのときにガリ版刷の戦後に作ったらしい丁未倶楽部の会員名簿というのをくれました。これは、干支の読み方としては「ていび」ではないかといろんな人から言われたんですが、確かインタビューのときに鈴木さん自身が「ていみ」倶楽部と言っていたんですね。それで私は本にも「ていみ」倶楽部と仮名をふりました。

それから、同じ茅原華山関係で勢多左武郎という、当時、雑誌『第三帝国』の同人だった人の話を聞きに行ったことがあります。次の雨谷菊夫さんは、伊藤先生に連れて行ってもらって茨城で何回か聞いたものです。田所八重子さんは、田所輝明の奥さんです。

風早八十二は、これは全然違う筋からで、九大の75年史というのをやってまして、彼は九大に法文学部ができたときに来て、昭和初期に内紛があって辞職して東京に戻ってしまうので、その話を聞くと称して他の話もたくさん聞こうと思って行きましたが、昭和研究会に関することについては、「全く記憶にございません」という返事でした（笑）。あちこちから押してみましたが、「全然覚えてないですな」という感じでした。

村岡仁三次は、これもなかなか面白くて記憶にあったのであげたんですが、鹿児島県の被差別部落の歴史を共同で書くという仕事をちょっとやらされたことがありまして、この人は戦後の部落解放同盟鹿児島県連の初代委員長なんです。家まで行って話を聞いたんですが、壁に天皇・皇后両陛下の写真が飾ってありまして、南九州の被差別部落の解放運動の人にはときどきいるタイプなんです。彼は回想録を書いてますが、戦争中にこの人は大阪に行っておりまして、翼賛壮年団の地方の役員とかその類のことをいっぱいやってまして、その辞令などを回想録にダーッと並べてあるんですね。この人は解同ですが、近所の

共産党系の全解連の人のところにも話を聞きに行ったら、「村岡氏がなぜ権力者になったか分かるか」と聞かれまして、なぜなのか聞きましたところ、彼は翼壯の役員などをやっていたので、パージになりそうだというので鹿児島に逃げて帰ってくるんです。帰ってくると彼は書類が書けるものですから、近所の人いろいろな申請書の書類や何かの代筆をしてやっているうちにだんだんのし上がっていくわけです。そして最後は、貧困な農村ですから畑泥棒が出るんですが、そのときに彼が人民裁判をやったんだと。一方で書類を作ってやりながら他方で人民裁判をやり、そうやって彼はここの権力者になったんだという話で、これは非常に面白くて印象に残るインタビューでした。

大体そんなところですが、何かご質問があればお答えしたいと思います。

**伊藤** 僕がこれとちょっと関わるようなこととお話をしなきゃならないことが若干ございます。1つは、棚橋小虎という長野県出身の、麻生とか山名義鶴などの仲間です。彼は中間派ですが、20年ぐらい前に信州に行ったときに、彼の家を訪ねて史料を見せてくれという話を延々やったんですが結局駄目でした。そしたら、つい最近になって毎日新聞の方から、棚橋の自伝を本にするので解説を書いてもらえないかという話がきまして、なぜ私なのかと聞いたら、あのときお見せできなかったことを非常に残念に思っているという話でありました。それで、これは自伝なんですけれども、もとは日記なんです。非常に詳しい日記が死ぬ直前まで残っているということですが、自伝のほうは昭和40年代に書いているものですから、ソ連に行っているときの話——プロフィンテルンの話とかそういうことは何となくモヤモヤとなっておりますし、それから翼賛会、近衛新体制をかなり彼は一生懸命やっているはずなんですけれども、その部分はあまり出てこないという状況ですが、日記のほうはいずれ見せてくださるということです。それから、その自伝も一応、昭和12年まで書いて、そのあと遺族が日記からの抜粋で全部亡くなるまで作っただけなんです。それで全部を出したいといったんですが、これは出せないで、その昭和12年までのところのものを少し抜粋して出すということになりました。これは社会運動関係で有馬さんも多分ご関心がおありではなかろうかと思っておりますので、いずれこれに手をつけますので、そのときはご協力をお願いいたします。

もう1点は、前から内政史のインタビューを何とかもういっぺん活字にしてきちんとしたものになりたいと考えていたわけですが、赤川氏が今度は本格的にやろうということになりまして、それで最初に出すものをいくつか候補をあげたんですが、その中の1つが、ここにいくつかあがっている内政史の鈴木正吾さんとか稲村とかなんです。これは近日中に連絡があると思っておりますので、それもご協力をお願いしたいということです。

なお、つい2週間ばかり前に上原勇作の孫から電話がありまして、会いたいというので会いまして、前から年賀状に毎年しつこく20年ぐらい書いておりましたものから、日記をどうしましょうかという話で持ってこられましたので、すぐ預かりました。あまり

急に預かったものですから彼もちょっと心配になって、どうするんだという手紙を寄越したんですが、それには忙しいので返事を出していないという状態になっています。これは季武君とまたいずれよくご相談してと思っておりますが、手帳ですのでそんな詳しい日記ではありません。それから、何かの参考のためにというので陸運省が持って行ってしまったということで、日清戦争・日露戦争とかそういうところはポッポッと抜けていて、戦史を作るあれかどうかはよく分かりませんが、例の2個師団のところもないんです。しかし、宇垣陸相問題の辺りはずっとありますし、その前後——明治9年ぐらいからずっと30冊ぐらいありますので、少し大型の手帳ですから情報はある程度あります。

有馬君が九州に行かれるときに僕自身が言った言葉を僕も記憶していますが、永江、野田、宮崎県史、それから黒木親慶と、こういうふうに広がっていくとは想像もいたしませんでした。これは非常に大きな成果だと思っております。これ整理できる人とか、それを裏付けるお金とかいう問題はどこでも共通に大問題なんだろうと思いますが、そういうものを引き出すことができるシステムを、何とか研究会の成果としてセンターを作って、それを通じていろんなことができるようにしていきたいと思っております。ただ、考えてみると本当に整理ができる人が少ないんですよ。最近、史料などはどうでもよろしいというような研究者が大分増えてきたようで、そういう話もときどき聞くものですから、非常に憂慮しております。

**有馬** そういう意味では、地域史の編纂というのは非常に大きい意味がありましたね。最近はそれなりに行政も研究者の言うことを聞いてくれますので、整理のための人員を嘱託で雇ってくれるとか、アルバイトとか、そういう面ではかつてに比べるとかなりよくなったかなという気はします。

**伊藤** そうですね。そういうことを1ヵ所どこかでやると前例になりまして、役所というところは前例が非常に大事ですから、どこどこでこういうことをやっているから調べなさいと言うと、それと大体見合うような形でやってくれます。ただ、いま地方自治体が非常に財政が厳しいので、そこは本当に渋いですね。

**有馬** もう1つの問題は、自治体史の編纂というのは結局、現状ではやはり有期限ですから、私に関わっているものもだんだん終わりかけてきているわけです。しかし、終わりかけてきているといっても整理が終わっているわけではないですから、これをあとどうするかというのが問題です。財政の裏付けがあるというのは一面ではとてもよかったです、逆に問題は学生さんがお金をもらうのに慣れちゃって、「史料の整理に行こうか」と言うところ「いくらですか」という、これはちょっとまずいなと。最近、ボランティアの復興というのをやらなきゃいけないなというふうに思っているんです(笑)。やっぱりそれはかなり問題なんですね。

それともう1つの問題は、自治体史の編纂などで史料を集めてますと、公開性の問題が

出てきます。これはある意味では止むを得ないし、いろんな条件つきでも、ともかくなくならないように預かるということはそれはそれでいいんですが、もう一方は、ああいう組織でやってますと、どうしてもパーソナルな関係で動く面が出てくるんですね。これはかなり公平性に欠ける史料の見せ方になるという問題があって、これも何とかしなければいけないと思っていますところですよ。

**中見** 黒木の件に関してですが、黒木和雄さんに2度目に行く前にお会いしたら、例の高橋治さんにお貸しした話しについて、彼と親しい方かと思ったら全然そうではないんです。映画監督というのは系統があって、黒木さんは岩波系なんだそうです。それに対して高橋さんは松竹系の、しかもレッドページか何かでクビになったというたいへんなボスらしい。それで頼まれたら嫌とは断れない状態なので貸したんだと。どうも黒木さんは、高橋さんはもうこれをなくしたのではないかと非常に疑っているんですね。

それから、黒木さんの事務所に伺いますと言ったら、来てほしくないよ。ともかくすごいところらしいんです。それで経済的にもたいへんで、弟さんが岐阜か何かにおられて、その方がかなり黒木家の資産のことは関心をもってらっしゃって、まして家にそんな変な人が入ったりすることを心配してますから、そういうことがあって、2度目に行ったときに倉庫を開けてくれと言ったら、その弟さんの許可を得なければいけないというようなことになっているようでした。

それから原さんのところのロシア語文書は、ロシア人の専門の人に全部解読をやってもらったと聞いております。

この大内暢造というのは、東亜同文書院のですよ。

**有馬** そうです。

**中見** 愛知大学に東亜同文書院に関する資料センターができたようですね。

**有馬** 同文書院関係の史料は愛知大学に行ってます。

**伊藤** まだいろいろ質問したいことがあります。あとのことだけ先にご相談したいと思います。1つは我部政男さんをお願いしてあります。それは来月やるか再来月やるか。もう1つは、伊藤さんに前から言っておられた佐藤能丸さんで、ご都合のよろしいように10月、11月というふうにやっていただこうと思います。他にどなたかご推薦の方はいらっしゃいますか。

**伊藤（光）** 吉良芳恵さんはどうですか。

**伊藤** 開港資料館の吉良さんも候補にあがっております。

それでは、5時までまだ時間がありますので、皆さん自由にご質問ください。

**中見** この末永節の文書というのはどのぐらいあるんですか。

**有馬** 末永文書は量そのものはかなりありました。いろんな雑多なものがありましたよ。

**伊藤（光）** 旗はなかったですか。

**有馬** 旗はありました。井田紅旗はありました。

**有馬** これは一応、福岡市の博物館も買うことは考えていたんですが、博多の市内に住吉神社というところがありまして、そこの敷地の中の家に住んでいたんですが、その養女の方が家ごと買い取ってほしいという要求を福岡市に出して、これが結構古い家ではあるけれども、ことさらに保存するような家でもないんです。それでちょっと膠着状態になっているようです。これは熊本の『宮崎兄弟伝』という本を書いた上村希美雄さんという人が見て、残っているものでも結構いいというふうには言ってましたが、あっと驚くようなものはなかったという印象が強いですね。

**小宮** 鍋島直彬関係文書は、行けばすぐ見せていただけるんですか。

**有馬** これは目録で出てますから見られます。ただ博物館なので、閲覧に対応する体制というのがいちばん問題ですよ。だから、事前に連絡して行ったほうが無難です。

**小宮** 貴族院の時代の実態みたいなものはかなり分かりますか。

**有馬** かなり中身がありそうな感じがするんですが、多分これは誰もまだ使っていないと思います。もしご覧になるのであれば、事前に言っていただければ連絡しておきます。

確かこれは2000万とか3000万とか、そういうお金で買ったはずですよ。大体どこでも収集予算というのは非常に少ないですよ。ただ、ここは博物館なものですから、会計の枠をちょっと別れているんですね。財団からお金が出るという形にしているので、ここは割と収集予算は持っているほうじゃないかと思えます。

**伊藤（光）** 展示費を流用しているんじゃないかな。

**有馬** いや、もうできて随分になりますよ、まだ年間1億ぐらい持っているんじゃないですか。

**広瀬** 福岡の県立図書館というのはあまりないんですか。

**有馬** あるんですけど、僕が自分でいじったものがないからここには書かなかったんです。随分いろいろ持ってまして、いま見に行こうかなと思っているのは、戦前に福岡市長をやった河内卯平という人がいまして、その人の関係文書が非常に量が多くて面白そうなんです。ただしこれも日記は非公開です。

**伊藤（光）** いま非公開ということですか。将来はどうですか。

**有馬** これが問題なんです、ああいうところは一応それで預かってしまうと、あと担当者が代わったりするので、公開に持っていくための継続的な努力をなかなかしなくなっちゃうんですね。福岡にあるのでは、大物は安川敬一郎の日記を北九州の資料館が持っているんですが、これは預かっているだけで全く非公開です。

**伊藤（光）** 預託だけですか。

**有馬** そうですね。上手くやれば何とかかならないこともないんじゃないかなと思うんですが、あまり強引なやり方をしないんですよ。



**小池** 社会運動関係という、森戸の書簡もいま手をつけて整理をしていますが、結構出てきましたよ。大体 1500 点ぐらいありますから、いま紙に打ち込みをやって内校をやっと終わらせて、テキストファイルにするやつがいるんですけど、もしよろしかったら先生のほうに。

**有馬** あと福岡県内の資料所蔵機関では、福岡市総合図書館というのがあります、これは市の図書館なんですね。この中に文書資料部門というのがあって、そこが文書を集めています。機能的には福岡市の公文書館という位置づけです。

**小池** 九大のほうはどうですか。石炭研以外で、前に大学史が書いてありますが、大学史以外はどうですか。

**有馬** 近代史料を集めているところはないですね。九州文化史研究所というところがあるんですが、これは基本的には近世史料を集めているんですけども、その連続で近代まで史料があるというのは随分あります。だから、個別の文書できょうあげなかったのもまだいっぱいあるんです。地域調査をやるときには大体、いきなり行ってもしようがないですから、その地域の郷土史料館とか歴史資料館というような類のところ、これはたいてい場合は人が 1 人しかなくて、しかもその人は埋文の担当だとか、そういう形になっているので文書になかなか対応できないんですけども、それでも地域の郷土史家などが持ち込んだりするものを整理はしていなくても持っているとか、あるいは情報はありますから、あらかじめそういうところを通してそれなりの情報を得て行くんですけども、やはりまだ相当ありますね。

ただ、文書館がやっている調査ではないので、県史の編纂をやりながらやっている調査ですから、なかなか調査として完結しないんです。手をつけて概略が大体分かったけれども、完全な目録はできてないで文書は家に置いたままとか、そういう状態のものが随分あります。何年か経って行くと虫が食ってたとか、なくなっていたとかいうことがあるんです。もう少しシステムティックにやれないかなと思うんですね。

調査そのものは随分やられてまして、県立図書館は古文書の緊急調査というのを随分やって目録もたくさん出しています。ただ、その頃は近代史料はあまり注目されてないですから、そういう目録を見ると大体、「明治期あり」とかで中身は全然分からない書き方の調査報告書が随分いっぱいありますね。

**中見** 九州には、いわゆる文書館というのはあまりないんですか。

**有馬** 県の公文書館があるのは、沖縄と大分だけなんです。実は大分に僕は行ってなくて、どのぐらいの中身があるかちょっとよく分からないんですけども、それ以外は全くないですね。それで、やや文書館の類似機能を持っているのは、いま言った福岡市の総合図書館の文書資料部門というところで、あとはもうないですね。

**広瀬** 大分は去年行ったんですが、県庁文書そのものはものすごく少ないです。それで、

文書館と図書館と先哲記念館の3つが一緒になって、館長が1人しかいない。それから、近代以降が文書館で、近世が先哲資料館というふうに分けてやっていて、先哲資料館のほうが、史料を探すよりも先哲資料叢書という、矢野竜溪とかああいうのに力を入れているような感じです。

**有馬** 県庁文書は宮崎は全国有数ですけども、あと比較的ましなのは、長崎、佐賀、熊本。いちばん駄目なのは多分、福岡だと思いますね。県庁の書庫に1度入りましたけれども、明治期から継続的にあるのは殆どないです。あそこは県の広報をマイクロフィルムに作るときですら図書館から借りてきて写してましたから、非常に惨憺たるものですね。長崎は、古いものは割といいですね。佐賀もそこそこ面白いものを持っています。それとあと鹿児島がちょっと駄目ですね。

**小池** 何で鹿児島は駄目なんですか。

**有馬** どうでしょうね。ともかく宮崎が鹿児島に合併されていた時代のものが宮崎にあるだけで、鹿児島県には全然ないですね。

(終わり)